



1 ファイアンセの奴隷調教

「ふふっ。お〇んこ四の字固め」をやってみたかったのよ。さあ、こっちに来る！」

仰向けに寝ると脛脛に頭を載させられ、蒸せかえる匂いとともに硬い陰毛の森に口と鼻を完全に密着させられた。頬に覆いかかるように、お客様の内腿が押し掛かる。もう息もできない。ガチャーン。頭のほうで食器の倒れる音がした。

「さあ、舌を出して奉仕するんだ」お客様の声が開く。呼吸もままならず、乾ききった豪毛に覆われたお〇んこの中に舌先を突き出した。

乾いたクレバスに、意味もなく舌を這わせ舐め廻したが、硬い陰毛との摩擦で舌先の粘膜が剥がれ、ヒリヒリと痛く、さらに呼吸のできない窒息感と恐怖に、空気を求めて顔を左右に強く振った。

「こいつ、もう苦しがつてもがいていやがる。まだ30秒と経っちゃいないんだ。もう少しくらい根性を見せろ！」

お客様の怒りの声が虚ろに聞こえ、仕方なく大人しくしたが、それも一瞬のこと。苦しみの限界を超え顔を強く振った。

「本当に根性なしたよ。このまま窒息させてやるか。良いでしょ、テラ」

「構わないけど、まだ結婚前だから廃人にならないでよ。それより、お茶が床に染み込んでるよ。それを片付けさせてから、ゆつくり虐め遊びましょう」

奴隷契約書第1条(目的)に「……婚約者の快楽に貢献できるよう、あらゆる虐めに堪え……」と記されており、僕はテラさんの快楽に貢献できるように、奴隷カルチャーの他でも奴隷調教を受けている。虐められること自体が、結婚に向けての奴隷調教の目的なのだ。しかし、お友達を使って僕を虐めさせることは契約違反にならないのだろうか？ 窒息しそうな臆腫とした意識のなかで、そんなことを考えていた。すると太腿が突然外され、突然呼吸が回復した。

思いっきり口を開けて空気を求めると、お〇んこの異臭とともに、新鮮な空気が胸を満たす。「さあ、ティーカップを片付けて、床を拭く！」テラさんの声が僕を急かす。起き上がり食器を持ちキッチンへ出す。床に零れて染みになった紅茶を四つん這いになって拭き取る。そんな惨めな格好の僕を美女お二人が見下していた。「嗚呼、暑い。汗を流したいわ。風呂はどこ？」お客様の声高に叫ぶ。

「ほら、風呂に案内して！」テラさんに言われ、慌てて僕は入口のドアの横のガラス戸を指さした。

「こちらです」

テラさんに言われ、慌てて僕は入口のドアの横のガラス戸を指さした。

「狭い！」聞こえよがしに言われるお客様

「男の部屋なんだから仕方ないよ。これだつて会社で借り上げたアパートで、運転手の給料じゃ、精々10万円そこそこでしょう。男がいくら一生懸命に稼いだつて20万円も貰えない世の中なん

だから、この程度のアパートがお似合いなのよ」テラさんが見透かしたように言われる。

「そうね。将来は立派な奴隷になるしか生きて行く道はないんだからしょうがないか。アハハ」

お客様の笑い声に、惨めさが身体を寂しく包む。そうだ、男は結局、結婚して御主人様にお仕える奴隷になるしか生きて行く道はないんだ。なんと惨めな生涯なのだろうか……。

「舌奉仕させようかしら。良いでしょ、テラ？」お客様の無茶なことを言われている。

「良いわよ。ブライダル奴隷カルチャースクールで訓練しているはずだから、少しは上達したでしょう。さっさと脱いで頭を突っ込んで寝ろ！」

嗚呼、テラさんのご命令には従わなければならない。僕は服を脱ぎ、仰向けになり、言われたように風呂場の床に頭を突っ込んで寝た。

ガチツ。煙草に火を点けたお客様が、全裸のまま僕の真上に立ち、小椅子を頭の横に持つてくると、浴槽のほうを向いて、僕の頭を跨ぎ腰を落としてきた。

熱い女陰が顔を押し潰してくる。テラさん以外の女性様の女陰にも御奉仕できるなんて、なんて僕は幸せなのだろう。

「よし！ 舌を出して舐める」テラさんの声に、さらに嬉しくなつてテラさんの女陰を舐めた。「下手くそ。ちゃんと舐める！ なんで、あたしがテラの調教に付き合わなければならない訳？

あたしが近づくと、男どもはみんな逃げ出しやがる。そんなにあたしが怖いのか？ もう、嗚呼、この奴隷、意外に舌使い上手いよ……ああ……」